

II 大久保貝塚

本文目次

はじめに	1
一 遺跡の位置と歴史的環境	2
二 調査の経過	4
三 出土遺物	6
四 自然遺物	8
五 まとめ	10

挿図目次

第1図 沓岐縄文時代遺跡分布図	3
第2図 大久保貝塚周辺地形図	4
第3図 土層断面図	5
第4図 出土遺物実測図	7

図版目次

図版 1
上 大久保貝塚近景
中 土層堆積状況
下 土器出土状況

表目次

第1表 沓岐縄文時代遺跡地名表	3
第2表 大久保貝塚出土貝の個体数と比率	9

図版 2
上 完掘状況
中 土器
下 骨製品・石器

例 言

- 本編は長崎県沓岐郡石田町筒城東触字大久保所在大久保貝塚の調査報告である。
- 調査は熊本大学文学部考古学研究室大久保貝塚調査団が2001年8月23日から9月1日までの10日間実施した。
- 調査参加者・整理作業者は以下の通りである。
調査参加者
甲元眞之 杉井健 大坪志子（以上教官）
中川毅人（大学院2年生）呉判錫 河合章行（以上大学院1年生）村田勉（学部3年生）
仲矢咲紀 前田知聖（以上学部2年生）
整理作業者
甲元眞之 杉井健 大坪志子（以上教官）
中川毅人（大学院2年生）呉判錫 河合章行（以上大学院1年生）
芝康次郎 西嶋剛広 松本周作 村田勉（以上学部3年生）上野平優紀 仙波靖子 中里陽道 中田伸一
仲矢咲紀 前田知聖 望月大輔 森幸一郎 村上彩 安元香名美（以上学部2年生）
- 調査・整理については、以下の諸氏・機関に御協力・御指導いただいた。（敬称略）
河合雄吉（石田町教育委員会）安楽勉 高野晋司 中尾篤志（以上長崎県教育委員会）
石田町教育委員会 長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所
- 動物遺存体（脊椎動物）、植物遺存体の鑑定については、それぞれ山崎純男氏（福岡市教育委員会）、椿坂恭代氏（元北海道大学埋蔵文化財調査室）にお願いした。
- 石材の鑑定は松本幡郎先生（元熊本大学理学部）にお願いした。
- 動物遺存体（貝類）の鑑定・分析は、中川が行った。
- 本編におけるレベル高はすべて海拔をあらわし、方位は真北をあらわす。
- 本編の挿図と図版の遺物番号は対応する。
- 遺物の実測・拓本は分担して行い、製図は遺物を大坪、河合が、その他を仲矢、村上、安元が行った。
- 本編の編集は河合が行い、執筆分担については執筆者名を各文末に示した。

はじめに

日本列島に展開した初期農耕文化について、従来は稲作栽培を基盤として生成展開されたことが様々な観点から論じられてきた。最近では花粉分析、コラーゲン分析、プラント・オーバー分析など各種の研究手法により、極めて多様な穀物が栽培されていたことが知られるようになり、中には縄文時代前期に遡上しての穀物栽培の存在が主張されるに至っている。

しかしこうした自然科学的手法による分析においても、それら資料自体では所属年代が決定できないのであり、考古遺物との共伴状況の検討が重要な課題となっている。また、「共伴関係」の認定においても、包含層検出の対象物の場合は穀物自体が微小な存在であるためにコンタミネーションへの配慮が必要であり、穀物の同定とともにその年代を如何に正確に把握するかという問題も残されている。このためには遺跡から穀物種子を検出して種を同定し、それ自体をAMS法による年代の測定を試みるのが今日最も望まれる試みであろう。

日本列島において穀物栽培の起源がどこまで遡るにせよ、先史時代から古代にかけての長いスパンと地域的な多様性を視点に据えて、栽培穀物のもつ生活上の比重を当時の生業形態全体の中で位置づける必要があり、そのためにも個々の遺跡における種子を中心とする植物遺存体の具体的な検出とその同定・年代把握の追求が肝要であることは言うまでもない。

今日、日本考古学の資料は行政の緊急調査により得られるものが殆どであり、そこでは石器や土器などの文化遺物や遺構の検出に重点がおかれ、費用と時間的余裕がないかぎり、微小な植物遺存体については考慮されないのが実情である。このために文部科学省に科学研究費を申請し、九州各地の行政調査に携わっている研究者と共同で、植物遺存体の検出の可能性が高い遺跡発掘において土壌のサンプリング調査を行うとともに、小規模の発掘調査を企画して植物種子の採取にあたることとした。

今年度の調査は次の研究組織により行われた。

熊本大学：甲元眞之、木下尚子、小畑弘己、杉井健、大坪志子

研究協力者：山崎純男（福岡市教育委員会）、立石泰久・辻村美代子（佐賀県教育委員会）

赤崎敏男（八女市教育委員会）、高野晋司（長崎県教育委員会）、岩永哲夫・

谷口武範（宮崎県教育委員会）、中村愿（北谷町教育委員会）、

椿坂恭代（元北海道大学埋蔵文化財調査室）、杉山真二（古環境研究所）

今年度の発掘調査は、先史時代から古代にかけて、外来植物が日本に伝来するルート上に位置する長崎県壱岐での調査計画を立て、高野晋司氏の紹介により石田町大久保貝塚で小規模の発掘を行い、植物遺存体の採集に努めるとともに、壱岐島での縄文時代遺跡の立地条件の検討を試みた。

また長崎県福江市中島遺跡での発掘調査により得られたアズキとヒシの年代測定を古環境研究所に依頼し、その結果が次のように得られた（半減期はリビーの5568年）。

C14年代	補正年代	暦年代（西暦）	測定番号
アズキ：2120±50 BP	2120±50 BP	交点 BC160	160561
ヒシ：5850±50 BP	5820±40 BP	交点 BC4700	160562

（甲元）

一 遺跡の位置と歴史的環境

地理的環境

壱岐は、九州と韓国を結ぶルート上に位置し、東西約15km、南北約17kmの本島と28の付属島（有人島5、無人島23）からなる。本島と小属島を合わせると、面積は約138km²である。島の基盤は第三紀層であるが、表面のほとんどが玄武岩によって覆われている。標高が100mを超える山地の割合は非常に少なく概して低平と言えるが、内陸部では開析谷が複雑に入り組み急激な崖面を形成し、海岸線は出入りが複雑で岩礁性のところが多く、海岸平野の発達は乏しい。その中であって、島の東南部は海岸からなだらかな地形が比較的大きく広がり、砂浜が発達している場所も多く認められる。

大久保貝塚 の立地環境

大久保貝塚は、壱岐島東南部のこのような砂浜の一角にあり、砂浜から東方に突き出た小山状の岬（標高14.2m）の基部に位置する。遺跡は、この岬から西側に下った麓にあたり、周辺よりやや高まった砂丘上に立地している。北側は海に向かって急激に落ち込んでいるが、これは波浪によって削平されたためと考えられる。岬の周辺には人頭大の礫が多くみられ、遺跡は現況において、砂性と岩礁性の環境を合わせ持つ立地条件にあると言える。岬の高まりのやや下った所には弥生時代の大久保石棺墓がある⁽¹⁾。

歴史的環境

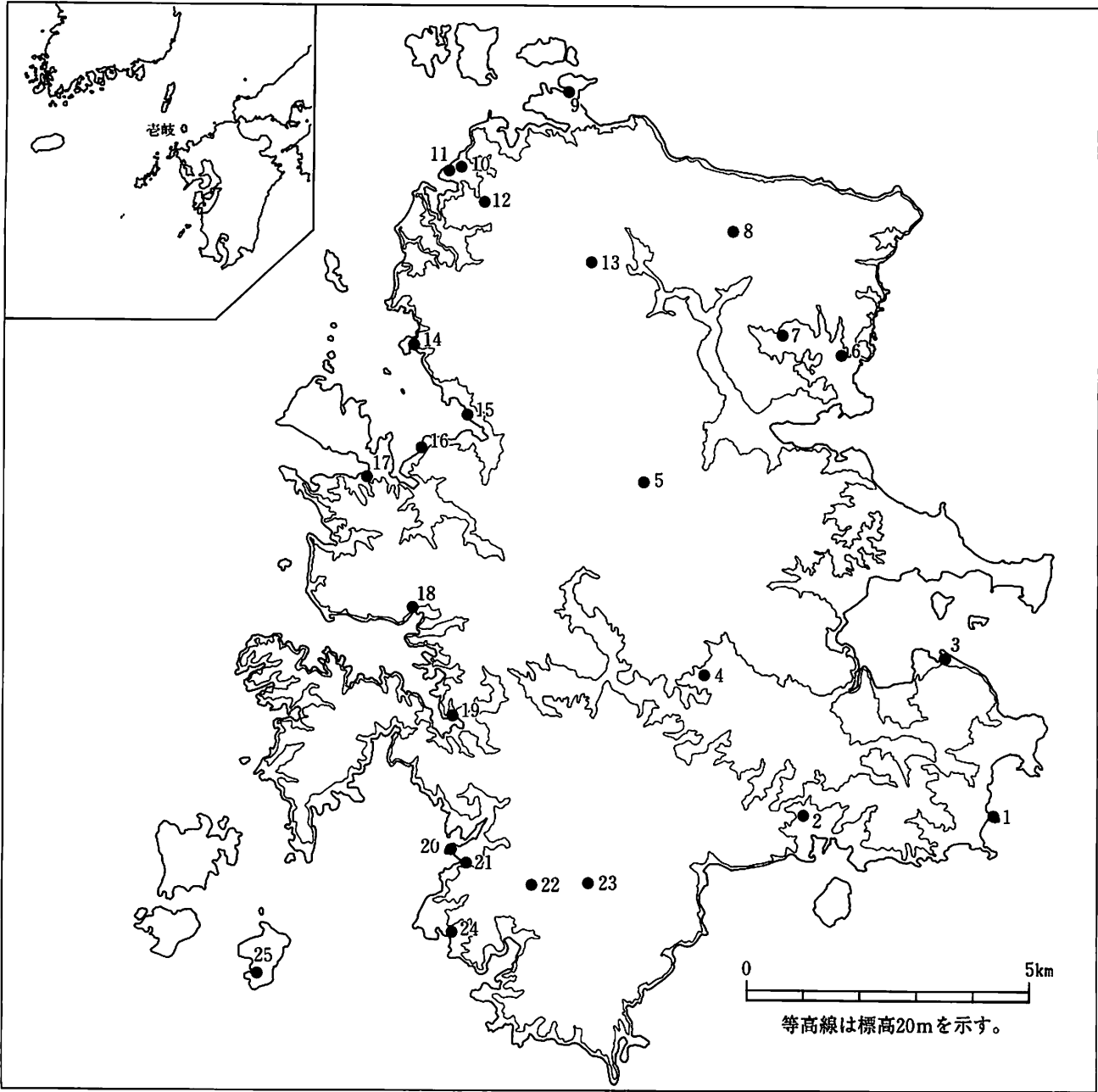
壱岐は、古くから対馬と並んで、日本と朝鮮半島・大陸を結ぶ重要な役割を果たしてきた島である。上述のような地理的条件が半島と九州地方の交流をより活発化させたものと思われる。実際、先史時代から両者が活発に交流していたことを示す考古遺物が、壱岐の各遺跡から出土している⁽²⁾。

壱岐では旧石器～古墳時代までの遺跡が450ヶ所以上確認されている。時代別に見ると、旧石器・縄文時代の遺跡数は少ないが、弥生時代になると遺跡数は増加し、北部のカラカミ遺跡、南部の原の辻遺跡に代表されるような大規模遺跡も見られるようになる。中国の史書『魏書』の「東夷伝倭人条」には弥生時代後期の壱岐の様子も描かれており、文献資料と考古資料の両者から当時の様子をうかがうことができる。古墳時代になると、現存する古墳だけでも250基以上が確認されており、中でも6世紀代の大型石室を持つ古墳が集中して分布することは、日本と朝鮮半島との関係における壱岐の地理的重要性をよく物語っていると言えよう。奈良時代以降は、律令体制の施行に伴い、壱岐にも国府、国分寺が設置され国の扱いを受けるようになる。中世には、文永・弘安の役、いわゆる蒙古襲来により相当の被害を受けるが、その後は倭寇松浦党の根拠地として支配を受ける。以後藩政時代は平戸藩領となり明治までその統治下に置かれる。明治4年（1871）には廃藩置県により平戸県となり、同年長崎県に編入され現在に至っている。

（呉）

註（1） 藤田和裕編「大久保遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅺ』長崎県文化財調査報告書第91集 1988年。

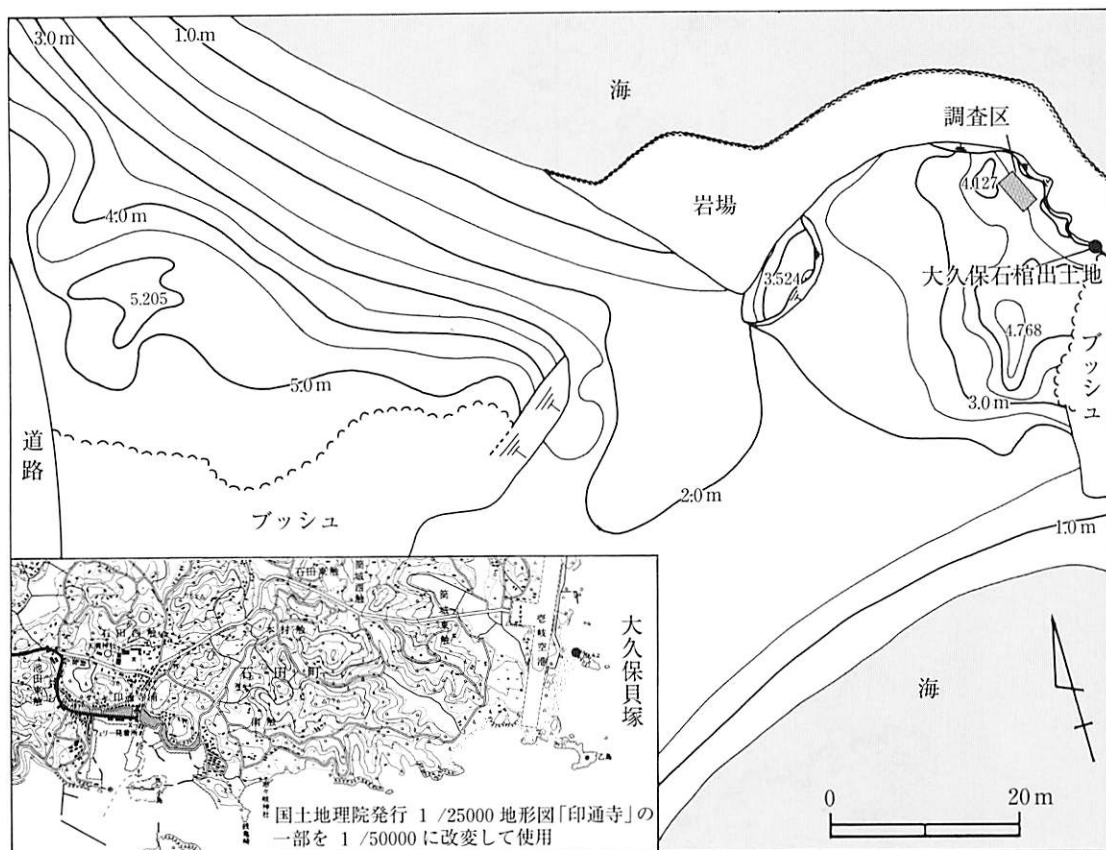
（2） 龍田考古会編『海峡を越えて』 2001年。



第 1 図 沓岐縄文時代遺跡分布図

第 1 表 沓岐縄文時代遺跡地名表

No. 名称	所在地	備考	No. 名称	所在地	備考
1大久保貝塚	石田町筒城東触大久保	遺物包蔵地	13前神田遺跡	勝本町新城西触字平川	遺物包蔵地
2白水遺跡	〃 石田西触白水	〃	14浦海遺跡	〃 本宮仲触字浦海	〃
3堂崎遺跡	〃 堂崎	〃	15松崎海底遺跡	〃 本宮南触字松崎	〃
4興触遺跡	芦辺町湯岳興触	〃	16大柳遺跡	〃 立石石触字大柳	〃
5大谷第 3 遺跡	〃 国分本村触字館山	〃	17浜遺跡	郷ノ浦町里触字浜	〃
6津持遺跡	〃 箱崎大左右触津持	〃	18御津ノ浜遺跡	〃 大浦触	〃
7大左右遺跡	〃 箱崎大左右触大左右	〃	19内野海岸遺跡	〃 半城本村触字内野	〃
8貝原遺跡	〃 箱崎本村触	〃	20鎌崎遺跡	〃 片鎌崎	〃
9串山ミルメ浦遺跡	勝本町東触字白浜辻、小串	貝塚	21名切遺跡	〃 片原触	〃
		遺物包蔵地	22木ノ本遺跡	〃 片原触字木ノ本	〃
10大石遺跡	〃 坂本触字大石、尾方	遺物包蔵地	23原遺跡	〃 若松触字原	〃
11尾方遺跡	〃 坂本触字尾方	〃	24馬立海岸遺跡	〃 坪触字小下シ、小形	〃
12水ノ元遺跡	〃 坂本触字水ノ元	〃	25池尻遺跡	〃 原島字池尻	〃



第2図 大久保貝塚周辺地形図

二 調査の経過

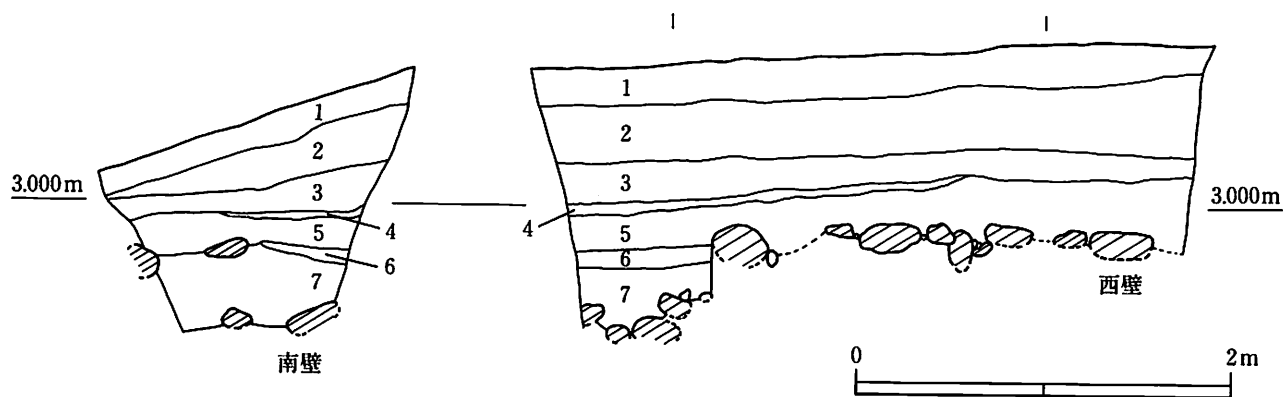
調査経過

大久保貝塚は、2000年に発見された縄文時代後・晩期の遺跡である。熊本大学文学部考古学研究室は、先史時代人の通年的な生業形態を解明するために、動植物遺存体に関する基礎的資料の収集を行っており、本年は自然遺物が良好に保存されていると予想される⁽¹⁾本遺跡を調査地に選定し、発掘調査を行った。

調査では、まず現況の確認および記録写真の撮影を行った。その後、貝層がみられる崖面の南側に2 m×2 mの調査区を設定し、周辺を除草してから掘り下げを開始した。砂丘遺跡の調査であるため、調査区壁面の崩落を防ぐために傾斜をつけながら掘り下げた。表土から包含層までの深さが約80cmに達したため、調査区内での作業スペースが十分に確保できなかった。そのため、南北に1 mずつ拡張して2 m×4 mの調査区とし、順次掘り下げを行った。自然遺物検出のため、廃土全てを2 mmのメッシュでふるい、遺物を抽出した。また、貝類の定量分析のために50cm×50cmの範囲で10cmごとにブロック・サンプリングを行い、計8サンプルを採取した。併せて、環境復原に有効な微小貝の組成分析のために、柱状サンプルを層ごとに500mlずつ採取した。

周辺地形

本遺跡の東側には大久保遺跡が所在し、1986年に石棺墓の調査が行われている。この時に周辺地形図が作成されている⁽²⁾が、それ以後当地が風雨や波浪にさらされたためか、現況とは大きく異なっていた。そのため、周辺地形図の作成も並行して行った。その結果、本遺跡が位置す



第3図 土層断面図

る小丘陵が東側に向けてかなり後退していることがわかった。そこで、風雨や波浪による調査区付近の地形改変を最小限に食い止めるため、調査終了後に砂、砂を詰めた土嚢袋、礫、土の順で埋め戻しを行い作業を終了した。

層序

調査の結果、以下の土層を確認した。

第1層：表土層。

第2層：にぶい黄橙色 (Hue10YR7/3) 砂層⁽³⁾。貝類はほとんどみられない。現代遺物が混入する。

第3層：にぶい黄橙色 (Hue10YR6/4) 砂層。貝類がみられ、礫が入る。遺物包含層。

第4層：にぶい黄橙色 (Hue10YR6/4) 砂層。基本的には第3層と同じであるが、貝が集中的に含まれる。第3層と第5層の間にレンズ状にみられる。遺物包含層。

第5層：淡黄橙色 (Hue10YR8/4) 砂層。2～3 cm大の小石や礫がみられる。貝類もみられるが量的には少ない。遺物包含層。

第6層：淡黄橙色 (Hue10YR8/4) 砂層。基本的に第5層と同じであるが、貝が集中的に含まれる。第5層と第7層の間にレンズ状にみられる。遺物包含層。

第7層：にぶい黄橙色 (Hue10YR7/4) 砂層。貝類、魚骨がみられる。遺物包含層。

遺物包含層は、第3層から第7層にかけて5層に分層できるが、これらの層から出土した遺物から明確に時期を分けることはできない。貝は第4層や第6層のようにレンズ状に集中してみられる。

大久保貝塚の範囲を確認するために貝塚周辺でボーリング・ステッキによる探査を行ったが、貝塚の範囲貝塚の存在を示す証跡を確認することはできなかった。従って貝塚の範囲はそれほど広範囲に及ばないものであり、本来は大きな貝塚であったとしても、大部分は海水による浸食のために既に破壊されたものとも考えられる。(河合)

註(1) 大久保遺跡の石棺内から弥生時代後期の人骨が出土している。人骨の保存状態は極めて良好であり、本貝塚においても自然遺物が良好な状態で遺存していると予測できた。

(2) 藤田和裕編「大久保遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅺ』長崎県文化財調査報告書第91集 長崎県教育委員会 1988年。

(3) 土色は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』日本色研事業株式会社 1986年による。

三 出土遺物

土器 本調査区からは縄文時代後・晩期の粗製土器が出土したが、約50点と少なく細片がほとんどである。これらは篩により採取したもので、3・4層を中心に散発的に検出された。ここでは図化に堪えるものと表採品を合わせて掲載した。

口縁部（1～4） 1はほぼ直立し、端部が外反気味の口縁である。内外面ともに貝殻条痕調整を施し、内面はその上からナデ調整が施されている。胎土は緻密で、浅黄灰色。2は若干内湾気味である。外面は貝殻とハケ状の原体による粗い条痕調整を施し、内面は横方向に丁寧にナデを施している。胎土には石粒や貝殻粉が混入する。にぶい橙色。3は直線的に開く口縁で、端部は平坦である。端部にむかって内側が外反するように薄くなる。他の土器に比べかなり厚手で、胎土は石英など白色石粒の混入が著しい。口縁端部に棒状工具で押さえたときみられる凹文が一ヶ所確認できる。器表面は磨耗しており調整などは不明であるが、元来無文であったと思われる。にぶい黄橙色。4はほぼ直立し、内外面とも指による押さえ・ナデにより調整されている。外面は比較的滑らかな感があるが、断面や内面を観察すると胎土にはやや大きめの石粒が含まれる。にぶい黄橙色。

胴部（5～8） 5は無文で内外面とも部分的に縦方向の指ナデを施す。胎土には黒色・浅緑色等の石粒を多く含む。にぶい黄橙色。6は「く」の字に屈曲する鉢形土器の胴部である。内外面に細い篋状工具で条痕調整を施す。胎土には砂・黒雲母・白色石粒を含む。黒色。7は内外面とも貝殻条痕調整を施すが、外面は特に顕著で、内面は部分的に指でナデ消す。胎土は粗く白色石粒のほか金雲母を含む。暗褐色。灰黄褐色。8は外面を篋状工具、内面を貝殻でそれぞれ条痕調整を施す。内面は条痕調整を行った後にナデが施されている。胎土は雲母や白色石粒をわずかに含むが緻密であり、1の口縁と同一個体と思われる。

表面採集品 9は調査区付近で調査以前に表面採集されていたものである。深鉢形土器の口縁部で外に開く。内外面とも細い篋状工具で粗い条痕調整を行っており、器面の凹凸が顕著である。口縁の外側に棒状工具による凹線を施すが、一周していない。また、外器面には格子状のヘラ描き文様がある。

出土土器の
時期

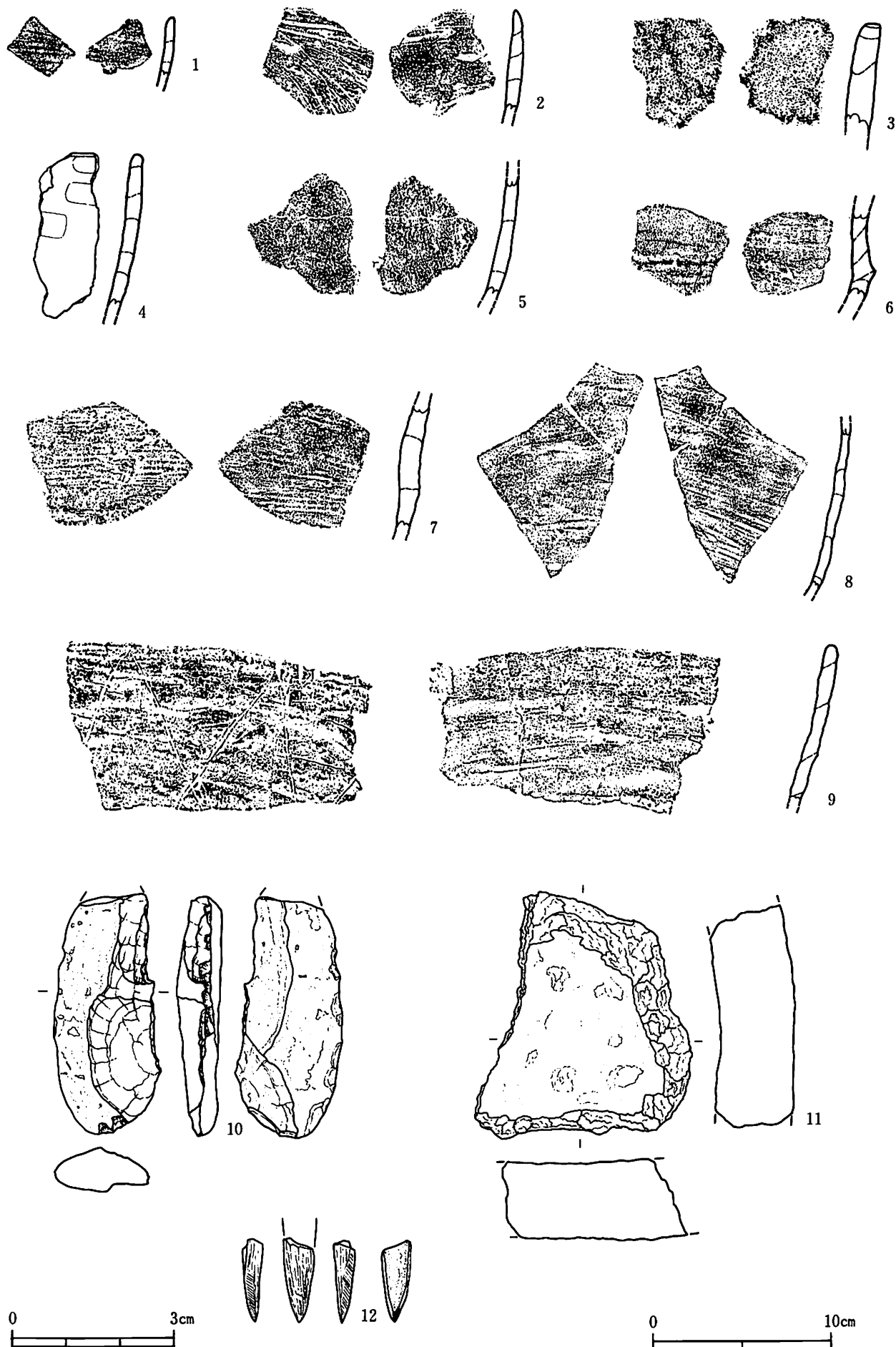
ここで取りあげなかった他の土器片も同様の所見を持つものである。縄文時代後期末の所産と思われる口縁部細片が調査区下方（5層以下）から出土しており、これらを勘案すれば、本調査区出土土器は後期末～晩期前葉の範疇におさまろう。（大坪）

石器 10は表採資料で、玄武岩製の打製石斧である。上端を一部欠損している。現存するのは最大長11.1cm、最大幅5.9cm、最大厚2.4cm、重量202gである。

11は玄武岩製の石皿である。上面は深く凹んでおり、他の面に比べて摩耗度が強い。周囲が破損しているため、本来の形状を復元することはできない。現存するのは最大長13.5cm、最大幅12.3cm、最大厚4.7cm、重量1040gである。

松本幡郎先生によると、これらの石器素材は、遺跡周辺で容易に獲得できるものである。

骨角器 12はシカの中指骨製刺突具の基部である。先端を大きく欠損しているため、全体の形状を復元することはできない。基部は丁寧に加工され、擦痕が顕著にみられる。（河合）



第4図 出土遺物実測図 (S=1/3、12のみ実大)

四 自然遺物

今回の調査では、2 mm方眼の篩を用いて掘り上げた土砂をすべてふるい、自然遺物の検出を行った。その結果、貝類、魚類、小動物、植物の遺体を検出した。

動物遺存体

(a)哺乳類		(c)爬虫類	
ノウサギ	<i>Lupus brachyurus</i>	カメ類	<i>Chelonia</i> sp.
(b)魚類		(d)両生類	
ネズミザメ科	<i>Lamna ditropis</i>	カエル	<i>Anura</i> sp.
サメ類	<i>Squalidae</i> sp.	(e)甲殻類	
ベラ科	<i>Labridae</i> sp.	カニ類	<i>Crustacea</i> sp.
アカエイ	<i>Dasyatis akajei</i>	(f)棘皮類	
エイ類	<i>Rajiformes</i> sp.	ウニ類	<i>Clypeasteridae</i> sp.
タイ科	<i>Sparidae</i> sp.		
マダイ	<i>Pagrus major</i>		
スズキ	<i>Lateolabrax japonica</i>		
フグ科	<i>Tetraodontidae</i> sp.		

植物遺存体（種子）

ヒルガオ科	<i>Convolvulaceae</i>	クマツヅラ科	<i>Verbenaceae</i>
-------	-----------------------	--------	--------------------

遺跡形成時の環境

哺乳類はノウサギのみである。魚類が検出された動物遺存体の多数を占め、そのほとんどは小型のもので、沿岸付近に生息するものである。貝類については、その組成をみるためにブロック・サンプルを採取した。サンプルは50cm×50cm×10cmを1単位とし、貝層上部から合計8単位を採取した。第2表に貝類の組成を示す。岩礁に付着する藻を食料とする貝類が多く、多くは遺跡前面に広がる岩礁域で採集されたものと思われる。また砂泥底に生息するものも多いため、遺跡形成時の環境は岩礁が広がる中に砂泥底も広がるようなものであったと考えられる。これは現在の遺跡前面の環境とほとんど変わらず、またクマノコガイ、スガイなどは現在でも生息しているため、当時の環境と現在の環境は大きく異なるものと思われる。また、貝輪の素材とされるタマキガイが幼貝も含め多数検出されたことは、注目すべきことである。植物遺存体は計4点出土したが、これらには栽培植物は含まれていなかった。

微小貝

今回自然遺物を検出する際、多数の微小貝が認められた。そのため通層的な微小貝の組成をみるために、柱状サンプルを採取した。サンプルは各層500cc ずつ採取し、研究室に持ち帰った後乾燥させ、0.45mm方眼の篩でふるった後ルーペを用いて検出した。ほとんどの種が元来砂中に生息するものばかりで、人為的な過程で遺跡内に入り込んだものではない。そのため微小貝が認められることを記しつつ、詳細は別稿にゆずることとする。

(中川)

第2表 大久保貝塚出土貝の個体数と比率

和名	科名	学名	生息域	個体数	比率(%)
クマノコガイ	ニシキウズ科	<i>Chlorostoma xanthostigma</i>	潮線下の岩礁	58	11.4
スガイ	リュウテン科	<i>Lunella coronata coreensis</i>	潮線内外の岩礁上	58	11.4
キサゴ	ニシキウズ科	<i>U.(S.) costatum</i>	潮間帯岩礫底	54	10.7
マツバガイ	ツタノハ科	<i>Cellania nigrolineata</i>	潮間帯上部	29	5.7
タマキガイ	タマキガイ科	<i>Glycymeris vestita</i>	砂底	28	5.5
アワブネ	カリバガサ科	<i>Crepidula gravispinosa</i>	他物に着生	26	5.1
イシダタミ	ニシキウズ科	<i>Monodonta labio</i>	潮線内外の岩礁上	24	4.7
クボガイ	ニシキウズ科	<i>Chlorostoma lischkei</i>	潮線内外の岩礁上	23	4.5
オオコシダカガンガラ	ニシキウズ科	<i>Omphalius pfeifferi carpenteri</i>	汀線岩礁上	22	4.3
ウミニナ	ウミニナ科	<i>Batillaria multiformis</i>	泥地	19	3.7
イガイ	イガイ科	<i>Mytilus coruscum</i>	潮線下の岩礁	17	3.3
トマヤガイ	トマヤガイ科	<i>Cardita leana</i>	潮線下	13	2.6
クジャクガイ	イガイ科	<i>Septifer bilocularis</i>	潮線下	11	2.2
ムラサキインコ	イガイ科	<i>Septifer virgatus</i>	潮線下	10	2.0
キクスズメ	スズメガイ科	<i>Sabia conica</i>	アワビ類に付着	9	1.8
イガイ科の一種	イガイ科	<i>Mytilidae</i> sp.	—	8	1.6
コシダカガンガラ	ニシキウズ科	<i>Omphalius rusticum</i>	潮線内外の岩礁上	7	1.4
ウスカワマイマイ	オナジマイマイ科	<i>Fruticicola despecta sieboldiai</i>	田園に群生	6	1.2
ケイトウガイ	キクザルガイ科	<i>Chama dunkeri</i>	潮線下	6	1.2
オキアサリ	マルスダレガイ科	<i>Gomphina veneriformis</i>	潮線下の砂泥地	5	1.0
エガイ	フネガイ科	<i>Barbatia lima</i>	潮線下	4	0.8
カラマツガイ	カラマツガイ科	<i>Siphonaria japonica</i>	潮線内外の岩礁上	4	0.8
ヒザラガイ	クサズリガイ科	<i>Liolophura japonica</i>	潮間帯岩礁上	3	0.6
イタヤガイ科の一種	イタヤガイ科	<i>Pectinidae</i> sp.	—	2	0.4
イボニシ	アッキガイ科	<i>Thais clavigera</i>	潮線内外の岩礁上	2	0.4
ウノアシ	ユキノカサ科	<i>Patelloida saccharina lan</i>	潮間帯岩礁上	2	0.4
サザエ	リュウテン科	<i>Turbo cornutus</i>	岩礁上	2	0.4
シオフキ	バカガイ科	<i>Mactra veneriformis</i>	潮線下	2	0.4
トコブシ	ミミガイ科	<i>Sulculus supertexta</i>	浅海の岩礁上	2	0.4
ベッコウザラガイ	ツタノハ科	<i>Cellana dorsuosa</i>	汀線岩礁上	2	0.4
レイシ	アッキガイ科	<i>Thais bronni</i>	干潮線	2	0.4
アマガイ	アマオブネ科	<i>Puperita japonica</i>	潮線内外の岩礁上	1	0.2
アワビ類	ミミガイ科	<i>Haliotidae</i> sp.	潮線下	1	0.2
オトメガサガイ	スカシガイ科	<i>Scutus sinensis</i>	潮線下	1	0.2
ケガキ	イタボガキ科	<i>Saxostrea echinata</i>	潮間帯岩礁上	1	0.2
コシダカサザエ	リュウテン科	<i>Turbo stenogyris</i>	テングサに付着	1	0.2
タケノコガイ	タケノコガイ科	<i>Terebra subulata</i>	潮線下	1	0.2
タマキビガイ	エゾタマキビ科	<i>Littorina brevicula</i>	潮線上	1	0.2
チリボタンガイ	ウミギク科	<i>Spondylus cruentus</i>	潮線下	1	0.2
ツタノハガイ科の一種	ツタノハ科	<i>Patellidae</i> sp.	—	1	0.2
ツメタガイ	タマガイ科	<i>Neverita didyma</i>	潮間帯の細砂底	1	0.2
マツカゼガイ	マルスダレガイ科	<i>Notirus mitis</i>	潮線下	1	0.2
不明	—	—	—	36	7.1

五 まとめ

大久保貝塚は、壱岐島東南部にある岬の基部に位置する縄文時代後・晩期の貝塚である。今回、本遺跡を調査地に選定したのは、先史時代から古代にかけて大陸と日本を結ぶルート上に位置する壱岐において、初期農耕文化がもたらされる時期の植物遺存体を検出する可能性があるかと判断したためである。

遺跡の立地と環境

本遺跡は、壱岐島東南部を南北に広がる砂浜から、その砂浜より東側に突出した小山状の岬にいたる砂丘上に立地している。また、遺跡の東に位置する岬の周辺には人頭大の礫が多くみられ、遺跡付近の海岸は砂と岩礁で成り立つという、壱岐における縄文時代後・晩期の遺跡立地と多くの点で共通している。遺跡北側では岩礁の間は約100mの幅をもって砂浜が海中に没していて、砂地を好む貝類に格好の棲息場所を提供していることが他の壱岐に分布する縄文時代遺跡と比べ特徴的である。

出土遺物の時期

本遺跡の層位は7層に分層でき、第3層から第7層までが縄文時代の遺物包含層である。これらの遺物包含層から出土した土器は判別できる限り、縄文時代後・晩期に位置づけられるが、細片が多いために詳細な時期を決定できる資料は少なかった。そのため、これらの包含層から出土した遺物を一括して縄文時代後・晩期の資料として扱うこととした。ほとんどの土器は胎土に貝粉を多く含み、器壁が概して厚いことが特徴であり、九州本土のものとは異質である。

生態環境

動植物遺存体等の自然遺物を検出するため、遺物包含層の廃土をすべて2mmのメッシュにかけ、多くの自然遺物を得た。また、ブロック・サンプリングやコラム・サンプリングを行い、微細な種子や、微小貝の検出に努めた。今回検出した動物遺存体は、魚類が多数であり、そのほとんどはベラ科を中心として沿岸付近で棲息する類で占められていた。微小貝を含めた貝類遺存体には岩礁に棲息するものと砂泥底に棲息するものの両者がみられ、このことから遺跡周辺の当時の生態環境は、現在のものと大差ないことがわかった。貝類の中で貝輪製作に使用されることの多いタマキガイが、稚貝から貝輪製作が可能な大きさのものまで出土しており、このことは、今後この遺跡のもつ意味を評価する折には重要な要素となるものである。一方検出した植物遺存体は西日本の沿岸地域に一般的に見られるものであり、残念ながら栽培植物を確認することはできなかった。

調査の成果

大久保貝塚は、壱岐の東海岸において数少ない縄文時代遺跡の一つであり、その概要を把握できたことは一定の成果と言える。また、微細な自然遺物の検出を行ったことで、遺跡周辺における古環境の概要を復原することができた。しかしながら、当初に意図したような、穀物を中心とする植物遺存体の検出は、果たすことができなかった。

今後の課題

先史時代とりわけ初期農耕文化の萌芽期において、栽培穀物のもつ生活上の比重を当時の生業形態全体の中で求めるため、個々の遺跡における種子を中心とする植物遺存体の検出とその同定・年代把握の追求が課題となっている。そのため、継続して土壌の水洗などによって多くの資料を蓄積することが、この分野の研究において重要である。

(河合)